

趣味

鑢つばのはなし

戦国時代には武器の一部として

大切にされた鑢も、平和な現代

では芸術品として珍重されてい

る。直径十センチに満たないこ

の美術工芸品には、長い歴史と

深い造形美が秘められている。

菅原鶴太郎

(歯科医・昭和町住)

手中の愛玩といわれるもの

一つに、刀の鑢がある。古色を

とうとび、その鍛錬のよき、透

しの妙をよるこび、手芸による

力強い金彫と巧みな象嵌をめ

る楽しみである。

鑢を愛する人の多くは、鑢だ

けでなく、刀装具の目貫、小

柄、筭、縁頭なども共に愛して

いるが、ここでは、とくに鑢を

主体にして話を進めたい。

鑢そのものは、本来、刀の外

装の一部にすぎないが、これを

美術工芸的にみれば、中々すて

がたい味のあるものだ。古くは

単なる実用主義であったが、室

町時代になって、とくに東山文

化の影響をうけてから、工芸的

た。

室町時代に入り、戦国様式の

変化から、従来用いられていた

太刀が打刀になり、打刀が主要

武器となったことから打刀拵

がうまれ、実用面を強調した堅

牢性に工芸的面も加味されて、

鑢の製作が急激に増加した。当

時は専門の鑢工というものはな

く、刀匠や甲冑師がその製作に

あたっていた。この刀匠鑢や甲

冑師鑢は、鍛錬された鉄の地金

がよく、素朴なうちにもっとも

雅味のあるものである。

江戸時代に

名鑢工が輩出

室町時代末期に、山城国伏見

に金家という名人が出て、従来、

の面でも時代の影響をうけて、

格段の発展が認められた。

江戸時代になってから、刀装

は、江戸時代美術工芸の各方面

の粋が、ここに集まったとまで

いわれるほどに、とくに優れた

ものが作られた。封建制度の確

立から、武家の諸制が完備し、

また富裕商人の台頭などから、

刀装はその色々な目的に合致し

た各種のものが作られた。

例えば、戦調用は勿論のこ

と、公的儀式用、道中用、外出

用、日常普段のものから、遊里

に遊ぶときのものまで、その日

的にあわせて色々な刀の拵が作

られたので、鑢にも各種のもの

が作られ、今日では色とりどり

な鑢が見られるようになった。

金工界の大御所後藤家各代を始

め、肥後には林、平田、西垣、

志水の四派が肥後金工の名声を

ほしいままにし、江戸には優美

な透しの赤坂鑢が出た。江戸中

期には、町彫の祖といわれる横

谷宗振が出て、富裕な商人の好

みにかない、その門からは柳

川、大森、石黒その他の各派が

出て有名である。

同じ江戸中期には、奈良三作

といわれる奈良利寿、杉浦乘

意、土屋安親が出て、斬新な図

柄や特色のある彫金法により、

新生面をひらき、中でも安親は

鑢の巨匠とまでいわれている。

各地においても、鑢工は藩の

奨励によって発達したものが多

く、前記肥後をはじめ、長州、

加賀、越前、薩摩など殊に盛ん

であった。

幕末になると、自由と斬新さ

に満ちた新天地を開いた後藤一

乗、加納夏雄は、ともに写実的

絵画彫金に秀で、金工技術の

粋はここに集まるといった感が

ある。

俱利伽藍などで

高名な秋田正阿弥

江戸時代における秋田の美術

工芸で、最も一般に知られてい

るのは秋田蘭画であろうが、刀

の装具を作った秋田正阿弥の作

品も斯界では有名である。鑢、

小道具の愛好者で、各流派を系

統別に収集している識者にとっ

て秋田正阿弥の作品は、是非と

もなくてはならないものの一つ

である。

本来、正阿弥は足利將軍家の

同朋衆の一つ、元米刀装具を作

っていたが、のちに全国各地に

別れ、京、秋田、阿波、伊予、

備前、会津、庄内その他に住

み、門葉大いに栄えた一派であ

るが、秋田に正阿弥が入ったの

は、秋田藩主三代目の佐竹義処

のとき、正阿弥伝兵衛重吉が佐

竹に仕えたことから始まり、一

門は幕末までつづいている。